

同窓会報

都立大学附属高校
同窓会機関誌
発行所 目黒区八雲
1-1-2 附属高校内
新制同窓会
(717)0749
責任者 内野滋雄
編集者 金子修一

「同窓会臨時総会」を前に……

理事長 内野 滋 雄 (1期)

盛会だった昨秋の総会や、今春発行された名簿に対しての多数の謝辞、賛辞などは、同窓会再建委員会としましてまいへん報われた感じがいたしております。と同時にご協力いただいた多数の方々に心からお礼申し上げます。

同窓会では、年二回の会報発行三年に一度の名簿発行を当面の事業としております。

ところが、この諸物価上昇の時期に、現在の会費収入だけではなんとすることも事業の遂行ができませんりました。

現在の会費収入は、在学中に毎月積立てたものを卒業時に一括して同窓会に納入していただいているもので、年額約八十万円になり

ます。しかし会報の発行だけで、年額八十万円を要します。

常任理事会はこの打開策として、高校卒業後十五年を迎えた時点で、追加維持会費五千円を納入していただくことを提案し、九月六日、評議員会にお計りしましたところ、幸にもご賛同を得ることができました。

そこで、この案を総会でご審議いただきたいために、十月二十七日(日)記念祭最終日の午後四時三十分から臨時総会を開催し、会員の皆様のご承認を得たいと考えております。

新名簿に関しましては、前述のようにおほめの言葉を数多くいただきましたが、ミスプリント、一

件の記載洩れなど不備な点もあり責任を感じております。これらは住所変更通知などと共に随事会報に掲載する予定ですので、ご了承いただきたいと思います。

又、四十七年度卒業生の名で、小生あてに、出身大学名を削除するようご意見が寄せられました。

文面からして四十七年度卒業生全員の意見ではなく、数名の方のご意見のようでした。

早速、理事会、評議員会で検討いたしました結果、(1)名簿としての便り、(2)知られたくない人も居るかもしれないが、知りたい人も更に多い、(3)最終学歴に拘泥する時代ではないなどの理由で、現状通り出身大学名を掲載すること

総会のお知らせ

一、日時 十月二十七日(日) 午後四時三十分～六時

一、場所 都立大学B棟百番教室(左図参照)

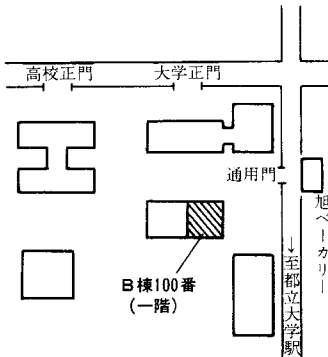
一、議題 同窓会追加維持会費の件、他

昨年同様、ビールパーティー(会費三百円)も

予定しております。

当日は、記念祭の最終日にも当ります。

是非ふるって御参加下さい。



にいたしました。しかしどうしても削除して欲しい方は、三年後の名簿作成の時期に、自分のクラスの評議員に申し出ていただくことにいたしましたのでご了承いただきたいと存じます。

評議員会では、(1)前述のように十月二十七日(日)午後六時から、臨時総会を開催し、昨秋のようなビールパーティーを持つこと、(2)名

簿訂正、その他連絡係として土B中田久子(旧姓草原)さんをお願いすること、(3)名簿には旧師の新勤務先なども加えてゆくことなどを決めましたのでご報告いたします。

住所、勤務先などが変更になった場合は、同窓会にご連絡下さるよう重ねてお願いすると共に、臨時総会には多数の同窓生がお集り下さいますようお願いいたします。

「入婚養子型男性」

体育科(2年担任) 甲 田 充 彦

都高に赴任してから七年目になる。新校舎が落成し、その当時の面影は全く残っていない。以前は久しぶりに来校された卒業生諸氏が気がるに校舎に入れたのに今度は恐る恐る人を訪ねることになるでしょう。私自身もその変化に未だについてゆけず、授業の場までいく間に知らず知らずにやっていた気力の集中が、さまたげられるのに困っている。種々のどうにもならない問題をかかえている本校に器が変わると中味も変るといふことを期待するのは虫がよすぎるだろうか。

学校というところはひとつの共同体である。肩をいからせてみても、所詮構造的環境と文化的環境と社会的環境とにぐるぐる巻きに取りまかれていて、その強さをどうすることもできないものとして認めてしまう傾向がある。一般社会ではコミュニケーション崩壊の危機が叫ばれ、それにストップがかけれられないままに崩れたが、よくしたもので今は復権の兆がみえてき

ている。都高コミュニケーションでは自治会はもとより、学年・クラスまでもがその日常的機能を停止して久しい。クラスマッチ・記念祭のときだけは形を整えて進められているようにみえるが、クラス・学年の機能を果しているとはいえない。生徒がクラスを考えるのが面倒になりすぐに持ち出す手取り早い方法は「有志」である。これだけが生徒の唯一の活動母体であり、要求圧力団体となる。そのグループが真の要求圧力団体となり活動するためには有機的に組織化がなされなければならない。この結びつきが内容として実に不充分であるためおかしくなっていく。よく二年生の間から「私のクラスって最低ね。何とかならないかしら」という声を聞く。二年生ぐらいまでは何とかならないかと考えているのは確かであるが、こんな苦ではないと言いつつ諦らめていく。学校側と生徒側、教師と生徒、生徒と生徒による指導性と自主性の接点の求め方がどうもへた

クソになったようだ。それとも「大変面倒くさいこと」になったのかも知れない。教師の間には内政不干渉の感が強く、生徒間も「個を尊重する」というカッコよさのあまり、益々バラバラになっていく。いつそのこともつとバラバラになればそこからおのずと生まれてくるだろうと期待していたのは現在の高等学校ゆえに無理だった。何日の何時何分に何番教室に集められた生徒の集団にはしたくないし、その努力を惜しんではならないと意を新たにしている。

都立高校のクラブ活動の低迷がいわれてかなりの年月を経た。ことに運動部の先輩方はヤキモキしている人も少なくないだろう。部によってはチームをつくれないうで練習はいつも三、四人。試合には

速成部員が穴をうめる。理由はここにとりたててここで言うつもりはないが、日常的な苦しみの積み重ねは嫌だが試合に出たい。基礎体力づくり、基礎練習は少なくゲーム形式でお茶をにごせばいい。まあこんなところだろう。都高ではことに二年生男子の退潮が目をはく。私もその責の一人であるので恐縮しているが、二年生がひとりもいず一年生だけの部が野球部バレー部と二つもある。今年になってあらわれた異常な現象である。反面、女子の部員は増え盛隆を極めている。途中退部者を追跡してみてもさほど学習成績もはかばかしくなく、受験勉強を始めたふうもいっこうにみえない。どうもこれは男子生徒よりも女子生徒の方が多い学年であることに起因して

いるのかも知れない。女子生徒にあおられてポシヤッてしまったのか。この頃男子生徒諸君をみていると皆、俗にいう「入り婚養子型男性像」と重なってきてもしかたがない。一方、女子生徒諸嬢は大変おっとりしていて、私はどうなるでしょう。型の子が多くなった。高校生活をこれからの生き方を目標値とする制御値と考える人は少ないようである。現時点だけが生きていることの実感を覚えることには違いがないが、「お前高校を卒業したらどうするんだ」という問いに他人事のように平気で「わっかんない」と独特のイントネーションで答える乙女達のかわゆいこと。いずれも愛すべき生徒達である。

「ある都立高校の父母会で」
「先生、この高校の進学状況はどうなんでしょうか。」
「まあ、一浪しなきゃ大学はムリですね。」

都高再見から都高再建へ

英語科 加藤 良雄

「トイレにタバコの吸いながら落ちてましたけど……。」
「うるさく注意してはいるんですがね。私達も困っているんですよ。」



（先生の説明を聞いていた母親たちが、教室をながめながらひそひそとささやく）

「校舎もきたないし、この学校いいところないじゃないの。」

※ ※ ※

右のような状況が、少なからぬ都立高校に共通して現われていると聞きます。学校群制度の施行以来、都立高校の輝かしい「伝統」と「威信」は急速に崩壊し、今年は入学辞退者が最高を記録するまでに至ってしまいました。そして——その都立高校の評判低下、まさに先頭で担っているような高校のひとつに、わが「都立大学附属高校」があるようです。

『同窓会報』一六号に、都大附高にまわされたために泣きに泣いた、という女生徒の話がのつていました。また、地域住民が都大附高（以下、「都高」と略す）に対して、根子よい嫌悪感と悪感情を抱き続けているという事実も、決して否定することはできません。

そのような中で、都高の、いや都立高校全体の威信回復の課題は、我々現場教師に重くのしかかってきているといえます。

僕は教師になって一年半、その三年半を都高で過ごしてきた青二才の教師です。この一年半は本当

に自信喪失の連続でした。しかし、その中でも確信をもったことがひとつだけあります。それは、多少一般的ななりませんが、我々教師はもっともつと自己主張をする必要があるのではないかとということですね。例えば、我々教師は時々「今の生徒は何を考えているかよくわからない」などともらすことがあります。しかし、生徒が何を考えているかを探る前に、教師側の考えをどんどん明らかにし、生徒側にもぶつけていくということが必要なのではないでしょうか。その中で生徒側との対立やあつれきが生じてくることも当然ありえます。しかしながら、多少の反発をうけても正しいと信ずることは決して譲らない、という断固たる姿勢を我々教師が堅持することこそ重要なのだと思うのです。教師仲間同士で議論しあう中ではじめて、生き生きとした教育が生まれるのではないでしようか。

※ ※ ※

同じ都立高校でも、実業高校などでは授業を成立させること自体が困難になっているといわれています。うるさくて授業などやれりません。分数の計算も満足にできない、と嘆く声が聞かれ

ます。さらに、社会的にみた場合現在権力の座にある人達が、教育を自分達の都合のいいようにしたいという下心から、教育についてさまざまなことを発言し、かつ干渉してきています。しかしながら、そのような困難な状況の中でも教師の地道な努力は決してとどえてはけません。生徒に基礎的な学力、体力、感受性を身につけさせるために、また、学力的に遅れている生徒をなんとかひきあげるために多くの教師は不十分ながらも努力をつみ重ねてきました。それは都

名簿係よりお知らせ

「昭和49年度同窓会名簿」を送りしてから3か月が経過いたしました。その間、誤植の訂正や不明者のご連絡やら、たくさんの方々よりお手紙を頂戴し、係一同皆様のご協力に深く感謝いたしております。

尚、お手紙の中には「名簿を見て大変なつかしく、高校生活を思い出しております」といった、感謝のお便りもたくさんいただきました。皆様のご連絡をもとに、現在、「訂正本」に記入し、次回発行

高においても同様です。その努力はいまだ、都高に対する世間の悪評を根底からくつがえすには至っていませんが、それでもその歩みは確実に始まっています。最後に、都高の図書館で定期的に発行している「緑陰」の最新号に掲載された一年生の文章の一部を紹介してペンをおきます。

※ ※ ※

「……私の心の片すみには不安と心配があった。合格して決まった学校が二十三群の中で一番遠い学校であり、あまり評判のよくな

の際に訂正いたしますのでご了承ください。

不明者、又は名簿が「宛所たずね当らず」で返送になった方の方の内判明した方には、その都度、名簿を発送しておりますので、受け取られていない方は、ご一報ください。

また、海外勤務の方は、費用の関係で、海外まではお送りせず、連絡先のある方のみ、連絡先の方へお送りしております。もし、ご帰国、又は連絡先がわかりましたらご一報ください。すぐ名簿をお送りいたします。

い学校だと聞いていたからである。（中略）でも、そのいやな感じは実際高校生活のスタートを切ってみてすぐに消え去った。上級生についてははつきりわからないが、少なくともクラスの人はみんなよい友だちばかりだったからだ。（中略）わたしは、もう学校の評判など気にしない。（中略）こころしいわわたしの学校で力いっぱい、楽しく悔いのない高校生活を友だちと共に過ごしていきたいという期待で、今のわたしの心は満ちあふれている」。

ここに「同窓会報」の紙面をお借りして、昭和49年9月6日現在の「名簿訂正事項」を掲載いたしますので、お手数ですが、お手持ちの名簿をご訂正ください。今後、同窓会報発行毎に、その2か月程前に切り、訂正記事を掲載しますので、名簿とあわせて保存していただくとう便利かと存じます。

誤植又は住所変更、不明者判明のご連絡等がありましたら、ごめんどどうでも必ずハガキで、左記宛お知らせください。〒152目黒区八雲一―一二 都立大学附属高校同窓会名簿係 より良い名簿作りのため、何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。（野口宛）

ふれあいの多重構造

伊藤 酒造雄 (二期)

私は順調ならば「二期生」として卒業できた筈であるが、病気で一年休学したために実際の卒業は「二期」となった。

入学したのは旧制高校(七年制)の尋常科(つまり中学)で、途中から新制に変わった関係で、当初の同期生とは五年半つきあい、落第後の同期生とは一年間つきあつた。つき合った期間の長短はあるが、私は他の人たちの二倍の同期生を持つことになった。

そして、これはふつうの人たちと余り変らないで、卓球部に六年半いたために、他の卓球部の仲間たちと比べると、やはり知り合った人々の数は多くなっているだろうと思う。

大学では芝居をやり、会社に勤めてからは組合運動をやつた。これらの仲間たちの何人かは、都立の仲間たちの何人かと同様、私の終生の友人である。

さらに、私は会社を一度変つており、その間に短期間だがフリーランサーの文筆業を経験している。

このことによって、また新しい友人、知己ができた。

さて、私は別に交際範囲の広さを誇示しようとしてこんな文章を書いているわけではない。順調に学校を卒業し、一つの会社に長く勤めている人でも、その人の性格や活動範囲によって、私などの何倍、何十倍の友人、知己を持っておられる方もいらっしゃるだろう。

ただ少くとも私自身に関しては、順調な人生を歩いて来ていたとしたら、現在の私が持っているような幅広く多様な人々とのふれあいの経験は、持ち得なかつたことは確かである。

社会的動物である人間は、たつた一人では人生を味わうことができない。「太平洋ひとりぼっち」の堀江さんでも、孤独な航海のあとに人間社会に復帰することによって、一層強く人生を味わうのではないだろうか。それはちやうど、長い禁酒のあとに飲む酒の味のようなものである。

私は自分の経験から確信を以つて

て断言できるが、少数の人間としてふれあつたことのない人よりも、多数の、さまざまの種類の人間とふれあつた人のほうが、より多く人生を味わっているものだ。そして、当人が健康な心の持ち主であるならば、必ず幸せの量もより多くなっている筈である。

私は同窓会は無用だ、あるいは害悪だと考えている若い同窓生の皆さんに再考をわずらわしたい。

たとえ同窓会が邪悪な存在(私にはとても信じられないが)だとしても、なおかつ同窓会は皆さんに幸せをもたらすのだということ。

こういうふうを書くに、私はいつも親切な人たちに囲まれて、何の苦労もなくこれまで人生を過して来た幸運な人間なのだと誤解されかねないが、たとえば、私の所属していた学生劇団の仲間の何人かは終生の友となつた反面、何人かは敵となつたし、組合活動は私の人生に最大の打撃を与えた。にもかかわらず、これらすべては、結局、私の人生を豊かにし、私の幸福の総量を増大させたという実感がある。

私には、私の人生が多重構造に見える。これが単一構造だったら、私はどんなに淋しいことだろうと思う。

そして、同窓会が再建されて、また一つ新しいふれあいの場が増えたことは、私の「多重構造人生」にとってこんな嬉しいことではないのである。

新任教師紹介

古い先生方が腰をおちつけて教育に當つて来られたため長い間人事移動がなかつた本校も、昭和45年当りを境に随分やめてしまわれた。

各自、いろいろな理由でやめられたであろうが紛争のわずらわしさも一因になっているにちがいない。

新任教師を紹介する前に、現在各教科に所属される先生方の名を明記することで、その変動を知つて頂こうと思う。

松岡敬久、齋 正子、久野 猛 (体育)

工藤好吉、前沢捷子、甲田充彦 船山鎮雄 (芸術)

西村正次、真籠五三子 (英語)

上田貞子、西山 節、浅羽札子 春山秀雄、加藤良雄、河合美恵 (図書)

有賀昭宣、岡田広子 (養護)

小野牧夫、田中精一、平島成夫 上田幸子、和田 強、大泉昭次 (社会)

西島 允、吉田夏生、大石史子 安食恒彦、栗原 純、平須賀和昭 (数学)

滝本達吉、新倉秀雄、大山 巖 岡田 弘、伊東 孝、岸 修 (理科)

松本 滋、岩山敬三、宮下博善

さて、「新任教師」を昨年、今年着任の教師とすると昨年3名、今年5名と変動は大幅である。

紹介事項は着任年度、出身地、卒業校、課目名、校務分掌とする。尚、年齢は本校の何期生位という表現にします。

和 田 強 (49。東京板橋。教育大。国文。指導部。13期生。最近甚にこつてます。バドミントン部)

西 島 允 (49。福井県小浜。東大西洋史。

目下教務課で奮闘中。 1 期生)

吉田夏生

(49。東京都八雲。都高7期生。都大
修士卒。水泳顧問。二年担任。豪傑
肌で粋くみがてつかい。)

栗原 純

(48。埼玉。東大東洋史。吹田顧問。
指導部。16期生位)

平須賀和昭

(48。東京台東。都大、倫理社会。一
年担任。はじめての担任でハリキル。

機研、新聞部。18期生)

岸 修

(49。東京荒川。都大数学。一年生の
数学を1クラス6時間ずつ教えてこれ
もハリキリ。音智部。19期生。独身)

加藤良雄

(48。山形県。東外語大、英米文科。
指導部。記念祭を前に栗原さんと一
諸にガンバル。陸上部。独身)

河合美恵

(49。岡山県。お茶大から東大教養学
部イギリス科。指導部。今年から共
稼ぎ生活へ。)

真籠五三子

(永い間音楽の講師でしたが今年から
専任へ。)

++++++ (S) ++++++

《会報係からお願い》同窓同報の紙面
を充実させるため、会員の皆様にご投稿を
お願いしたいと存じます。宛名は名簿訂
正と同様く同窓会気付でお願いします。